

アイスキュロス研究

序論

このアイスキュロス研究の主要論文は第Ⅰ部においては「アイスキュロスの文体と比喩」、第Ⅱ部においては「アイスキュロスの正義の思想」である。前論文は作者の文体の特徴が比喩と複合語による形容語句であることを指摘し、次論文は彼の思想の根幹をなす「正義 dike」について論じている。

アイスキュロスの文体の特徴については、彼の『小伝 Vita』に詩人が「新造語、形容語句、比喩を用いて荘重な作品を創り出した」と述べられている評語に着目し、それにアリストテレスの「措辞」の理論を応用して筆者独自の見解を導き出した。それは比喩と隠喩、形容語句、複合語は基本的には同一の内容を包含し、それが表現される際の形式の相違であるというものである。

筆者はこの「内包された比喩」という観点から『オレスティア』三部作について全ての「複合語による形容語句」を分析し、それを訳語に反映させてアイスキュロス独自の語彙表を作った。そしてその訳語が悲劇全体の文脈の中に違和感なく収まるか作品ごとに検討した。さらにかれの比喩と隠喩についても『オレスティア』を除く他の四作品において、それらの劇のシーンごとに用法を検討した。その結果、比喩には舞台上で視覚に訴えて表現できない舞台外の出来事や人物の内心の動きを描写する「彷彿性に富んだ活写力」があることを提示した。またそのような描写力を凝縮させた「複合語の形容語句」には簡潔で想像力の豊かな表現の可能性があることも指摘した。

しかしこれは可能性に止まるだけであり、すべての場合に成功しているわけではない。その発想の意外性と新奇さに観客が戸惑いを感じたことも多く、彼の作品が大仰で難解だという同時代人の酷評もこれに起因している。しかし神々が人間世界に介入する舞台上で、運命に翻弄されながらも昂然と苦難に立ち向かう英雄たちを描き出す悲劇にふさわしい荘重な文体に、この表現形式が大きく寄与したことは確かである。

アイスキュロスは、悲劇がディテュランボスに始まり、演劇として独立したジャンルに発達してゆく初期の段階に活躍した詩人である。当時の悲劇詩人は悲劇の創作と同時に、劇の演出や舞台装置、コロスの歌と踊りの振り付けなど演出に関わるすべてを取り仕切っていた。そのために、作品の演出効果について彼は後代の戯曲作家よりも遙かに細やかな注意を払っていたと思われる。

彼が劇創作と共に様々な演出上の試みをも行い、舞台装置や衣装などのような舞台上の演出に新しい工夫をしたことは、詩人の『小伝』の中で簡潔に述べられているとおりであるが、それに劣らぬ新しい試みを彼は言語表現によっても行った。舞台上で演じられる仕草や音楽など感覚的なものは、時間の隔たりの中で忘却され消滅して、その記録は遠い現代にまで伝わってはいないが、言語上の表現記録はテキストの精密な検討によって再現することが可能である。アイスキュロスのように比喩表現を多用した作家の

場合は、文体や措辞を詳しく検討することによって彼の創作姿勢を知る上でのよい手がかりが得られるだろう。

アイスキュロスの悲劇は独特な比喩表現と新奇な語句の組み合わせによる形容が特徴である。そのため彼の作品をよく鑑賞するためには詩人独自の比喩と形容語句の理解が大切になる。しかし比喩はアリストテレス以来文体論の中心テーマの一つとして研究されてきたにも関わらず、日本語で simile と metaphor の訳語が一定していない事実が示しているように、いまだにその明確な定義が共通のものとして認識されていない。筆者は早くからこの比喩の問題に関心を持ち、アイスキュロスの文体研究における重要な視点の一つとして捉えてきた。

その研究を進める際に、まずアリストテレスの『弁論術』と『詩学』における比喩の理論を定義としてまとめ、その定義を実際にアイスキュロスの個々の劇に用いられている言葉に応用して検討した。またアイスキュロスのいわゆる『小伝』には彼の生涯の略歴とその作風に関する評伝が簡略にまとめられているが、筆者はこの評伝の中の文体論に関する部分を取り上げてアリストテレスの理論と比較対照し、そこから得られた理論をアイスキュロスの現存の作品の中に現れる比喩にあてはめて検証した。

その成果は「アリストテレスの比喩の方法」の中で研究の方法論を構築する指針となり、『オレスティア』を除く他の作品の研究に応用された。『ペルシア人』『縛られたプロメテウス』『救いを求める女たち』『テーバイを攻める七人の将軍』の四作品で用いられている400例に上る比喩の実例はこの指針に基づいて検討され、用法が作品の流れの中で確かめられ、それらが評伝に記されたような詩人の作風形成に大いに寄与している事実が証明された。

それに加えて筆者独自の結論として、比喩は舞台の上で観客には認め難い現象、即ち登場人物の心の内面の感情推移とその表現、さらに舞台外で行われる事件の報告と描写をする場面で多用されている事実を指摘した。この事実は比喩の持つ迫真性と活写力を明確に証明し、アリストテレスの説く比喩論と『小伝』における詩人の作風に関する評言を具体的に裏書きしている。

さらに視点を転じてアイスキュロスの『オレスティア』三部作について、この悲劇詩人の文体の特質である複合語を用いた比喩表現にまで研究を進めた。アイスキュロスは詩人独自の創作による新奇で難解な複合語を多用する事で知られているが、この複合語は彼が比喩表現にこだわる余り既存の用語には満足せず新しい表現方法を求めて考案したものが多し。しかしこの新奇で難解であるとして従来非難されることが多かった複合語の表現の中に、巧みな比喩表現と豊かな想像力が潜んでいることを具体的な事実に基づいて証明した。

筆者はこの見解に基づいて『オレスティア』の比喩表現と共に複合語の形容語句をも研究の対象として、アイスキュロスの主要作品『オレスティア』についてこの用例を検討した。その研究から得られた解釈に基づいて形容語句の訳語の語彙表を作成しその解

釈が自然であるかどうか作品の流れの中で検討した。

詩人はその独自の思想世界を舞台の上に展開する手段として、既成の用語に頼ることでは足らずに、新たな言語表現の可能性を比喩と複合語による表現力に求めたが、そのために彼は大仰で難解きわまる新奇な表現を好んで多用する詩人であると酷評される結果になった。しかしこれは彼の創作上の失敗ではなく、新しい劇の様式には新しい言語表現を用いるべきだと考えて模索した詩人の苦闘の跡を示すものと理解すべきである。

さて以上のように文体論の研究を進めたが、アイスキュロスの劇作の基本姿勢を支える思想にも検討を及ぼさねばならない。単に新しい表現方法や演出効果を求めることだけが彼の創作意欲を支えていたのではない。筆者はその問いに対する答えを彼の作品の内部に、主人公たちの主張に求めた。古典時代の悲劇作家たちは、すでに観客たちにはよく知られている神話上の題材を好んで取り上げてその解釈方法において新機軸を競い合ったが、この創作態度は同じ題材を取り上げた他の作品と比較検討することによって知ることができる。

アイスキュロスの創作態度は彼の活躍した時代は、ギリシアが対ペルシア戦争に勝利を得、デーロス同盟の覇者として興隆していく時代であったことを抜きにしては論じられないだろう。しかし同時にそれは祖国の繁栄の頂点から衰退に向かう兆しを見せ始めた時代でもあった。この時代背景が彼の作品にどのように反映され、彼がそれにどのような姿勢を取っていたかを、彼の作品を他の作者と比較することによって探ろうと思う。文体研究はその手がかりを得るために作品を正確に解釈する手段である。